

はっけん

2023 年 7 月号

九州手話サークル連絡協議会

URL:<http://www.kyushuren.org/>



九手連研修会に参加して

佐賀

6 月 25 日、九手連研修会に参加しました。午前中は臨床心理士の井料美輝子先生の講演でした。福岡県の 5 校と熊本ろう学校のスクールカウンセラーとして活躍されている傍ら手話通訳士としても活躍されていて手話での講話は、読み取りの勉強にもなりました。スクールカウンセラー現場から、ろう学校の子供たちは聞こえないことで思いが通じていない。そして、それが普通だと思っていて困りごとにも気が付いていない。また、自分のことを話すのに慣れていない。子供たちの生活環境や成長過程は様々だが、困ったときは相談できるよう「高校 1 年 1 学期問題」として全員と面談をすることと、子供たちの「自分探し」が始まり、聞こえない人同士の支えあい（ピアサポーター）で成長していくことの大切さを話されました。

私事ですが、今、地域の小学生がスクールバスで登校するときに乗車確認をしています。顔を合わせた時に手話で「おはようございます」と挨拶していますが、まだ反応は薄くなかなか手話には関心を持ってくれません。一人でも多くの人に手話が広がるような活動は、講話の中の“子どもに届くボランティア”につながるのだと思いました。（唐津手話の会 田籠千恵子）



九手連研修会に参加させていただきました。午前中は臨床心理士で手話通訳士の井料美輝子先生の「聞こえない子どもたちの未来のために、今、手話サークルにできること」というテーマの講演でした。

ろう学校の子供たちにとって、家族でも先生でもない人との交流することがとても必要で手話サークルのメンバーがろう学校の子供たちと積極的に交流してほしいと話されました。午後は「ラーメン店オーナー&闘鬨門 JAPAN（鬨プロレス）を立ち上げた男」という演題で毛塚和義氏の講演でした。学生時代からプロレスの道を開き、ラーメン店

が有名になるまでの信じられないような経験談を楽しく話されました。夢を諦めず、できる方法を考えチャレンジしていく姿勢は見習わなければと思いました。それより東京に行き、「麺屋 義」の塩ラーメンを完食したいと思う気持ちが大きく膨らみました。

(小城市手話の会 宮原昌佳)



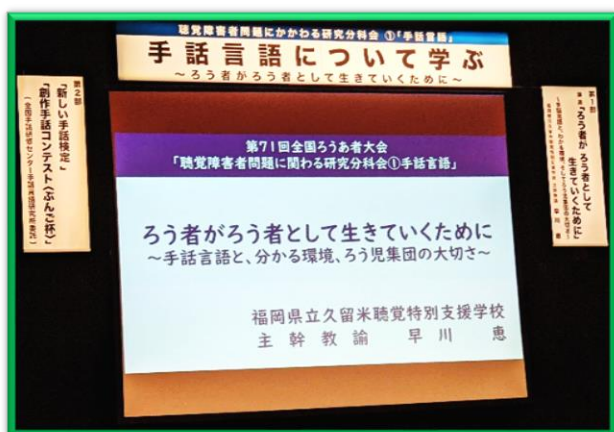
かなり共感した。Deaf 友は多い方やと自分でも思う。過去には会社の同僚にもいた。今もグループ会社の Deaf コミュニティに参加して色々情報交換している。やはり、孤独感…みんな言う。私はろう者と接していてもいつも気になる。どうしても私たち聞こえる同士だと声で話すのが常に楽。特に、手話のわからない聴者がいる中で一人ろう者がいる時、そんな時もうろ者はガマンしているのか？仕方なく諦めているのか？一人スマホいじったり寝てたり。ほんと、申し訳ない。

前に Deaf 友の家に遊びに行った。聞こえるお母さんと 3 人でお茶した。お母さん、よく話す。「通訳して」「これ言って」って…その友達と 2 人になった時、お母さんとあんなに通じていないとは思っていなかった。今までほぼ通じていると思っていたらしい。お母さんには友の声ははっきりしているので通じる。でも逆にお母さんの口元を 100%読み取れていなかったことをその時はじめて知った…ショックだって…。その時、通訳してよかったのか？悪かったのか？でも、ありがとうと言われた。お母さん、辛かったんやろうな。

初対面のろう者と出会っても、私が手話ができることを知った途端に水を得た魚のように話し出す。孤立しない、させない。手話が出来ても出来なくても、自分の気持ちが伝えられる、通じる理解してもらえって大事。そんな橋渡しをしたいと思った。(基山手話の会 松本美樹)

全国ろうあ者大会に参加して

福岡



沢山の方が参加された 6 月 10 日の全国ろうあ者大会。分科会は手話言語に参加してきました。この分科会は 2 部構成で、第 1 部は福岡県久留米聴覚特別支援学校の早川恵先生のご講演です。何度聞いても良いなと思う好きな話しがあります。それは、聴こえる子を林檎の木、聴こえない子を蜜柑の木に例えるものです。蜜柑の木はどうやっても林檎の木にはならない。でも、蜜柑もとても美味しい果物なのだから、そのまま立派な蜜柑の木に育

てれば良い。これはどの子にも当てはまる事で、私も子育て中に聞きたかったと思っています。また、ろう児について、子供同士で喧嘩をしたり、仲直りをしたり、そういう経験を手話言語の中である事が大切というお話があり、大きく頷く事でした。さて、第2部は新しい手話検定と創作手話コンテストです。新しい手話は日聴誌に掲載されている物なので、余裕で回答できると思いましたが、なかなか難しい。知っているというより、動きから想像して10問中8問なんとか正答にたどり着きました。創作手話コンテストでは、沢山の方が積極的に舞台に上がり表現をされる様に驚きました。皆さん素晴らしい!とても楽しかったです。手話の会の例会にも取り入れてみようと思います。単語をメモしてきたので、皆さんも表現を考えてみてください。「オセロ」「どや顔」「終活」「群衆雪崩」「誘導尋問」
(大野城手話の会 源 由美子)

五年の時を経て

私たち大川市手話の会は、お陰様で発足から五周年を迎えることが出来ました。そこには大川市身体障害者福祉協会前会長 平田勝政氏と大川市聴覚障害者福祉協会前会長 井上久美子様の願いが込められた新しい手話の会です。お陰様で最近では、大川市単独で講座を開けるようになりました。それまでは、柳川の方々の御協力を仰いでいました。サークル活動は、例会「昼の部」と「夜の部」の二部に分かれていて、金曜日の夜に講座を開講している時は、夜の部はお休みです。その代わり第二、四土曜日の午後に講座の練習と例会を開いています。二年前からお隣の大木町から私たちの講座に参加しています。会員の活動として最近多いのは、身障協と一緒にボッチャの練習をしたり、市内の小学校の福祉学習の授業で手話を教えたりしています。今までは交流会が出来ない状況でしたが、ようやくサークル会員・聴覚障害者・学生や受講生の方々との交流会を創設以来、初めて開催しました。聞こえない世界を共有し、手話を通じて聞こえる人も聞こえない人もコミュニケーションを楽しむことが出来、大いに盛り上がり、結束力が一段と強まったように感じました。最後に第71回全国ろうあ者大会in大分の式典に大川市から8名が大会に参加しました。全国の友人とも久しぶりに再会で会話が弾み、束の間の楽しい時間を過ごすことが出来ました。来年の和歌山大会での再会を誓い帰路に着きました。途中「海たまご」と「鉄輪温泉」に寄って、日頃の疲れを癒して帰りました。



もコミュニケーションを楽しむことが出来、大いに盛り上がり、結束力が一段と強まったように感じました。最後に第71回全国ろうあ者大会in大分の式典に大川市から8名が大会に参加しました。全国の友人とも久しぶりに再会で会話が弾み、束の間の楽しい時間を過ごすことが出来ました。来年の和歌山大会での再会を誓い帰路に着きました。途中「海たまご」と「鉄輪温泉」に寄って、日頃の疲れを癒して帰りました。

(県南地区 大川市手話の会 鐘ヶ江好子)

第71回全国ろうあ者大会 in おおいた

大分

大分県大分市と別府市で「よみがえれ 昭和の息吹 大分の地で！
～時はうつろい令和の世ではばたく～」をメインテーマに開催されました。

昭和28年の第4回大会から数えて70年ぶり、全スタッフにとって初めての全国大会。準備は大変でしたが、互いに協力し本番を迎えることができました。4日間の全日程を無事に終えることができたときは、ホッとしました。今大会に全国各地より2500人以上の方が大分県にお越しいただきました。参加して下さった皆さま、本当にありがとうございました！会場だけでなく、駅や街中などあちこちで手話の世界が広がっていました。

大会は、8日の全国聴覚障害者写真コンテスト入賞作品展、大分県立聾学校児童・生徒作品展を皮切りに、9日～10日にかけて、特別企画、研究分科会、日帰りツアー、演劇祭に前夜祭など盛りだくさんの内容でした。そして、11日大会はフィナーレを迎えました。

式典の歓迎のことばでは、佐藤樹一郎大分県知事、足立信也大分市長、長野恭紘別府市長がそれぞれ挨拶をくださいました。皆さま、自分の名前を手話で表現していました。その中でも驚いたのは、長野別府市長が最初から最後まで手話であいさつを行ったことです。会場は拍手喝采、大きな感動に包まれました。「手話言語条例」が浸透し始めている証だと感じました。主管団体表彰で

は、大分県から、産谷喜久太氏・奈須博幸氏が表彰されました。奈須氏は、大会を準備している最中に逝去されました。心残りであったと思いますが、その遺志は、仲間が受け継ぎました。特別決議では、2025東京デフリンピックに向けてのアピールがありました。また、優生保護法問題の全面解決を目指す強いメッセージもありました。全日本ろうあ連盟が、誰一人取り残さない、誰もが共に暮らせる共生社会を構築するために、歩みを止めない強い姿勢を示しました。急激に変わるものではありませんが、これらのメッセージを受けた参加者が、それぞれの地に帰り、準備を始める契機となるのが大会の成果ではないでしょうか。大会は、和歌山県に無事に引き継がれました。大分県での開催は終わりましたが、今回の経験が私たちの活動に繋がればと思います。





第71回全国ろうあ者大会 in おおいた 参加レポート

熊本

2023年6月10日 聴覚障害問題に関わる研究分科会

③スポーツ～2025年東京デフリンピック競技大会に向けた展望～

前半は久松三二事務局長と「目で聴くテレビ」重田千輝さんによる基調講演。

久松事務局長は、子供のころ“なりたい夢が持てなかった”自分が、デフリンピックを東京開催することで夢を持てた。子供たちにも夢を持ってほしい。この夏には大会のエンブレム、組織委員など発表できる。フェスなど開いて全国にデフリンピックを周知していく「見る・する・支える」をテーマに盛り上げる。



重田氏の基調講演



パネルディスカッション

重田氏は、デフリンピックの取材の経験から、ろう者と聴者の共生社会の現場を見て、それが実現できる実感を得た。デフリンピック開催で実際変わった台湾社会の話。東京開催で日本の社会が変われる。デフスポーツの面白さを広めたい。お二人の過去の経験から、それを活かして、次世代につなげたいという強い思いが伝わる基調講演だった。

後半は、バスケの日本代表も務めた吉田さん司会による、バド選手の矢ヶ部さんと自転車の早瀬さんとのパネルディスカッション。3人が選手として経験した、ろう者ならではの苦しみや悩み、その経験があってこそ、この大会にかける思いが語られた。共通して語られたのは、子供たちにデフスポーツのすばらしさを伝えたい思い。共生社会実現の未来につながるイベントになる。しなくてはという強い思いを感じた。要望として、国際手話の普及、各競技に応じたルールに詳しい通訳者の養成、選手の養成の環境整備などの課題提起がなされた。大会開催まで700日強。有るようで、時間はない。選手のためにも出来ること。改めて考えさせられた。手話普及、聴覚障害者にとっての共生社会の実現に向け、このイベントを最大限活かす方法は何か。東京だから、と遠い国の出来事のように思わないで、地域で大会を盛り上げていきましょう！
(人吉わかぎ 平澤 ちえ子)



第31回九州手話サークル連絡協議会 研修会

鹿児島

○午前の部(10:00~12:00)

「聞こえない子どもたちの未来のために今手話サークルができること」

～ろう学校スクールカウンセリングの現場から～

講師：井料美輝子氏(臨床心理士)

井料美輝子氏は、ろう学校スクールカウンセリングの現場で感じていることを伝えられた。

1. 難聴・人工内耳の子どもたちは、どのように聞こえているのか「60%の聞こえ」を体験した。いくつかの単語は分かってても内容を理解することは全くできなかった。このような状況で授業を受けている生徒は、焦り、不安、取り残された気持ちになる。先生の質問に答える余裕はなく、答えられないと叱責される。生徒らは、「手話で話すと考えられる。口話を読み取るときは他のことを考えられない」という。面談の際、中学部の寮生活未経験の生徒に「家族とのコミュニケーションで困っていることはないか。」と尋ねるとほとんどの子どもは「ない」と答える。そんな子どもたちが高等部に入り寮生活を送るようになると、土日に家族と過ごすことが億劫になってくる。寮の中で友人や寮職員と手話でコミュニケーションをとることが当たり前の生活を経験したことで、「自分は家族とコミュニケーションが取れていなかった」ということに気づくからだ。「“足りる”ということを知らなければ“足りない”ということが分からない」とのことだった。

聞こえていないのか「60%の聞こえ」を体験した。いくつかの単語は分かってても内容を理解することは全くできなかった。このような状況で授業を受けている生徒は、焦り、不安、取り残された気持ちになる。先生の質問に答える余裕はなく、答えられないと叱責される。生徒らは、「手話で話すと考えられる。口話を読み取るときは他のことを考えられない」という。面談の際、中学部の寮生活未経験の生徒に「家族とのコミュニケーションで困っていることはないか。」と尋ねるとほとんどの子どもは「ない」と答える。そんな子どもたちが高等部に入り寮生活を送るようになると、土日に家族と過ごすことが億劫になってくる。寮の中で友人や寮職員と手話でコミュニケーションをとることが当たり前の生活を経験したことで、「自分は家族とコミュニケーションが取れていなかった」ということに気づくからだ。「“足りる”ということを知らなければ“足りない”ということが分からない」とのことだった。



2. 現在埼玉ろう学校では、新しい考え方「デフフッド」で教育に取り組んでいる。簡単に言えば、ろう文化である手話を使い、社会生活で行き詰まったら、安易に聴者に合わせたり、考えを変えたりするのではなく、お互いにそれを解決する手立てを見い出していく。つまり、ありのままの私でいい、ろうである本人がどのようにして生きていくか探究することを目指している活動。
3. 「サークルのあり方を考えよう」では、①「ろう者がいる空間」を作る ②地域の聞こえない子どものための活動 ③連携できる地域の組織。「あなたのサークルはどんな活動ができそうでしょうか」との問いに、日々の活動を広げる多くのヒントをいただいた。

○午後の部(13:00~15:00)

「ラーメン店オーナー&闘鬨門 JAPAN (鬨プロレス) を立ち上げた男」

講師: 毛塚 和義氏(麵屋 義(よし)オーナー)

講師の尾塚和義氏は生まれた時から 耳が聞こえない。しかし、両親からは「ろう者だからを理由にしない。やれば何でも出来る。他人にはやさしく等」と育てられ、忠実に守っていた。小さい頃からプロレスが大好きで、プロレスラーを目指す。が、聞こえないということとどこの事務所にも所属できなかった。そこで仲間とろうのプロレス団体をつくり、「闘鬨門 JAPAN」という世界初のろうプロレス団体を立ち上げた。最初は自前でリングを自分で作るのさえ苦労した様子だったが、有名なプロレスラーとの試合も経験されたとのことだった。



プロレス団体の運営をするうち、自分のお店を持ちたいという夢が芽生えた毛塚氏は「食の道場」に入校しラーメン作りを学ぶ。聞こえないので、講師に交渉して、講義中の様子をカメラに収め、他の受講生からノートを借り、積極的に情報を得た。撮影した写真数は 3500 枚。40 人の受講生の中、トップの成績での卒業だった。

周りの人々の協力を得て、2016 年 8 月 東京 日暮里で開業。聴者である客とのコミュニケーションをスムーズにするため、注文は券売機を利用。今後は聴者とのやり取りがさらに円滑になるよう、「麺の硬さ、柔らかさ、ネギ不要などカードで伝える方法がよいのでは?」と思案中とのこと。失敗もあり、コの字型のカウンターでは聴者を挟んでろう者が会話したことで、聴者に不快感を与えたこともあったよう。大やけどを負うなどのアクシデントもありながら、ラーメン店のイベントでは 1 位を取るなど、日々美味しいラーメンの探究に余念がない。

今回の講演を聞き、私は行動をすることに“喝”を入れていただいた。懸命に生きていらっしゃる方々のお話に、自分を見直し、今できることを実行に移すパワーをいただいた。



(鹿児島県 手話サークル太陽 仮屋恵子)

(手話サークル青空 上村昭徳)

★【感想】

午前だけの参加となりましたが久しぶりの対面研修が嬉しかったです。

井料さんのお話を聞いて、サークルが聞こえない方々にとっての拠り所になるようにとサークル活動の原点だと改めて思うことでした。最近、なかなかサークル活動に参加できない自分もいるので、そんな私が出来ることも考えさせられました。

「聞こえる人の数は多いけれど、決してそれが『普通』ではない。ただ多いだけ。聞こえる人が基準の世界を捉え直す」という言葉や、多様性とは？自分の権利を守る、決める力を身につけさせる・・等々本当に考えさせられるお話の内容は、井料さんの実体験や実活動を通しての言葉は深く心に響きました。私も「ろう者がいる空間」を意識して過ごしているだろうかと思い、これから改めてサークル例会や活動も参加していきたいと思いました。

参加者がオンラインと対面合わせて 200 名程度だったのもっと多くの方にも聴いてもらえたらなあ～、内容が良かっただけに少し勿体ない気もしました。

私自身、午後は都合で見ることができなかったのが残念ではありましたが、託児があったお陰で参加することができ、大変ありがたかったです。ありがとうございました。

(鹿児島県 手話サークル太陽 直井龍子)

鹿児島県手話サークル連絡協議会 定期総会

令和 5 年 5 月 28 日(日) 鹿児島市鴨池公民館にて 鹿児島県手話サークル連絡協議会 令和 5 年度定期総会が開かれました。(会員数 233 名〈理事除く〉出席、委任状 201 名)

司会者の人柄がでた元気なあいさつとにこやかな雰囲気で総会が始まりました。

来賓あいさつ

鹿児島県手話通訳問題研究会の会長のあいさつでは、午前中に参加した地域での防災訓練の話や、地元の聴協と参加すると学びがあることを話してくださいました。

鹿児島県通訳士協会の会長は、昔のサークルの活動を例に取り、サークルは講習会の延長ではない活動の場であって欲しいと話してくださいました。

会長のあいさつは、コロナ禍の中でも地域の実情によって違いがあっても、ほとんどの地域で例会が開かれたこと。ここに集えたこと。初めての試みでリモートでの九手連の研修会を開催できたことの大きな成果と、各関係機関への感謝をつたえました。

議事は、2・3質問がありましたが滞りなく進みました。休会していたサークルが復帰することや、2024 年開催の「全国手話通訳問題研究集会 サマーフォーラム in かごしま」に向けて四団体が団結して取り組んでいくこと、新しい理事3人を迎え心機一転令和 5 年度の活動が始まりました。

(鹿児島県 手話サークルまなづる 池田美香)



「手話サークルが輝き続けるには」と題した討議は、A～Dまでのグループ（各 8～9名ほど）に分かれて行われました。私はDグループで、グループの中では、長崎からは私のみ。佐賀・大分・熊本・鹿児島からの参加者とのグループ討議となりました。

巧みな司会進行のもと、まずはグループ内での自己紹介及び役割分担（進行・タイムキーパー・記録・発表）から始まり、サークル活動の現状紹介など、項目ごとに時間を区切りながら各グループ同時進行で討議を行うことができました。

グループでは、各々直面している課題や悩みを、付箋に 1 枚に一件ずつ書き出し、1枚ずつ提示しての語り合い、課題に対する解決策を探るべく、優先課題と解決に向けた方向性や明日から取り組みそうなことなどを整理していきました。

グループ討議をする中で、どのサークルも、内容のマンネリ化・会員数の減少・高齢化・役員等の引継ぎの問題など、同じような悩みを抱えているという気づきと共に、自分の視野の広が



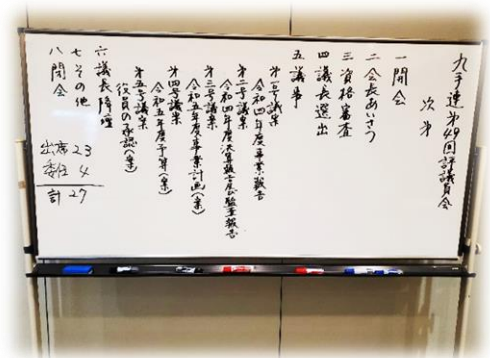
りを感じることができました。特にサークル学習会（例会）における内容のマンネリ化における解決策については、「周囲の人に懸念されることもあるけど、新しい挑戦も、とにかくやってみるしかないですよ。」という意見があり、とても感銘を受けました。失敗はつきものですが、この「とにかくやってみる!」を心に留め、今後の活動に活かしたいと思いました。（長崎県 長崎手話サークル 南 美和子）



第 49 回評議員会

6 月 24 日（土）、4 年ぶりの対面形式での評議員会が、サンメッセ鳥栖にて開かれました。5 月より新型コロナウイルス感染症は 5 類相当へ引き下げとなりましたが、感染対策に留意し、来賓をお招きせずに理事と評議員 27 名での協議となりました。

池尻会長のご挨拶ののち、開催県である佐賀県から



選出された寺川議長の進行のもと、すべての議事は滞りなく拍手で承認されました。

令和5年度予算について大きく変更のあった点は、コロナによる活動制限を受けて1/3になっていた会費がもとの300円に戻った点です。これに関連して支出の部、会議費のなかの組織強化費に九手連オンラインアカウント取得費を含むかとの質問があがり、会計担当より、取得のメリットデメリットを把握したうえで検討するとの返答がありました。また、令和6年度の九手連創立50周年事業に向けて金銭の動きがあることを想定し、九手連基金会計予算支出の部、特別事業費にも多少の増額がありました。



役員改選では新体制役員からのご挨拶ののち、今年度で理事を退任された大分県の大下氏より「他県との関わりの経験がなく、リモート会議にも緊張していたが周囲の支えて続けてこられた。これからは一会員として行事に出席しますので、よろしくお願いします。」とのご挨拶がありました。

2年にわたるご活動、本当にお疲れさまでした。（長崎県 大村手話サークル 井川真智子）



編集後記

7月に起きた水害では、再度線状降水帯による大雨の被害が発生し、8月に入る前から毎日高温が続く、コロナが5月に五類相当に引き下げられたにも関わらず、いまだにマスクが手放せない中、各県より寄稿いただき7月に発行できました。本当にありがとうございました。九手連ホームページ URL: <http://www.kyusyuren.org/> の機関紙「はっけん」をご覧ください。「掲示板」へ皆さまのご意見、ご感想をお寄せください。



九州手話サークル連絡協議会
発行責任者 池尻和吉
事務局長 小濱規男
広報担当 福岡県 上森信義